

平成 30 年 12 月例会会場  
神奈川県立金沢文庫

交通アクセス

京急線「金沢文庫」駅下車  
東口より徒歩約 1 2 分



1. 三井住友銀行の前を通り、スリーエフ前の信号（金沢文庫駅前）を渡り右に進む。
2. 金沢文庫バス停で左折し、緑色舗装の一方通行路（ゆるい上り坂）を進む。
3. クリーニング店（金沢文庫近道看板あり）で左折し直進、突き当たりが金沢文庫です。

※下記のホームページでも御覧いただけます。

「神奈川県立金沢文庫 利用案内」

<http://www.planet.pref.kanagawa.jp/city/bunko/riyouannai.html>

《シンポジウム》「称名寺の千字文説草を考える」

神奈川県立金沢文庫に保管される称名寺聖教の中には、表紙の右上に記された千字文によって分類されている説草群があり、「千字文説草」と呼ばれている。現在確認できているだけで、粘葉装を中心に約一七〇点の鎌倉後期写本が存在する。千字文は、説草の内容による分類のようだが、經典注釈から説話的な記事まで多様な内容が含まれる。これらの説草には奥書等がほとんどなく、由来を示す情報が乏しいことから、安居院の説草や東大寺尊勝院弁曉説草のようにまとまって注目されることは少なかった。しかし、既知の説話集等に所収される話を相対化する材料も含むもので、鎌倉後期の説話資料として重要であり、經典受容のあり方や、場に応じた説話の動態を考える上でも興味深い。また、一部の説草には、杉本寺など鎌倉での唱導に用いられた形跡があり、東国における法会や唱導の実態、そうした環境と説話の関係もうかがわせる。

称名寺聖教の弁曉説草や湛睿説草は、近年、活字本として刊行され、研究活用されている。これらに続いて千字文説草の翻刻紹介を進める中での中間報告として、本例会では千字文説草について見えてきた問題等について報告する。なお、金沢文庫で開催中の特別展「顕われた神々―中世の霊場と唱導―」にも、本シンポジウムで言及する千字文説草の一部を展示しており、あわせて御覧いただきたい。(高橋悠介)

\*

\*

\*

千字文説草の特色と所収説話

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 高橋 悠介

千字文説草については、これまで説話的内容や彫刻史との関連において注目される幾つかの説草が、個別に取り上げられ、分析されてきた。誓願寺縁起の展開や和泉式部伝承に関わる『誓願寺阿弥陀事』や、鎌倉大仏に関する『大仏旨趣』などが、その代表例である。その一方で、教説的な記事から法会で用いられた表白、また説話に至るまでの、約一七〇点に及ぶ説草群の、全体にわたる性格も考えてみる必要がある。

本報告では、まず千字文説草の書誌・形態や筆跡、書記形態、千字文による分類方法などについて整理し、その特色を確認する。一部の表紙には「清書了」と記されるものがある一方で、寸法や書記形態も異なるものが含まれており、一度に全てが書写された説草群ではないようだが、ある程度、共通する性格も認められる。そして、全体の特色をみた上で、幾つかの説話を取り上げ、これまで知られている説話集所収話を相対化し得る例や、特徴的な表現などを報告しつつ、千字文説草の意義について考えてみたい。

歴史学からみた千字文説草

神奈川県立金沢文庫 貫井 裕恵

弊館で管理する国宝「称名寺聖教・金沢文庫文書」のなかにみえる千字文説草は、中世東国における法会の場をいまに伝える貴重な説草群である。本報告では、中世東国における法会の風景をいまに伝えるこの説草群を、歴史学の立場から考えてみたい。

千字文説草は、いつ誰がどこで、どのような目的で法会を開催したのかについての情報がうかがえるものもあり、説草の作成・使用された歴史的営みを知ることができる。千字文説草のなかからこうした記述を通覧することで、説草群の生成と利用という観点から、中世東国における法会の場合とその機能を復元してみたい。

また、千字文説草のテキストにはあまたの説話がみえ、なかには歴史的事実を背景に叙述されたものも散見される。歴史史料としての千字文説草の可能性について考察を加えてみたい。

### 千字文説草の經典受容

大正大学（非常勤） 高橋 秀城

千字文説草には『法華経』をはじめとするさまざまな經典が引用されており、鎌倉後期における經典受容の様相や、当時の僧侶の知識体系をうかがうことができる。『灌頂経』『雙観経』（『無量寿経』）といった密教・浄土教の所依の經典が、逆修や無常を説く説草に用いられている点も興味深い。

中には、もとは漢文である經典を書き下した説草も見受けられる。例えば、勧進に関わる内容を持つ千字文「丁」の付された説草群には、『阿育王傳』巻七の内容をほぼそのまま訓読した説草が含まれる。阿育王説話が、勧進のための法会場で読み上げられていた実態とともに、『阿育王経』の異訳である『阿育王傳』が、どのように訓読されていたのかを知る上でも注目される。本報告では、千字文説草における經典受容の有り様や訓読の問題、さらに調査の過程で見出した説話的内容を持つ説草について報告したい。

### 千字文説草の法華経説話

国文学研究資料館 恋田 知子

千字文説草には法華経に基づく説話が数多く認められるが、なかでも特に千字文「宇」の付されたものには、法華経釈から因縁譬喩譚に至るまで、法華経に関わる多様な説草がまとまって伝来している。説話的要素の色濃い因縁譚は、『法苑珠林』や『法華伝記』などにその典拠を見出すこともできる。

この度の調査により、「宇」の説草群のなかに、能「葵上」への影響を窺わせる説草として知られる天理図書館蔵『冬嗣公姫君事』と共通する説草があることが判明した。『冬嗣公姫君事』については、夙に阿部泰郎氏「唱導における説話―私案抄―」（『説話・伝承学八五 説話と儀礼』桜楓社、一九八六年）、落合博志氏『源氏物語』と能―〈葵上〉を中心に―（『国文学解釈と鑑賞』五九―一一、至文堂、一九九四年十一月）の詳論があり、真福寺蔵『類聚既驗抄』や『法華経直談鈔』などにも類話が認められ、唱導の場で広く用いられていたことが見てとれる。本報告では、上記の説草の紹介を中心に、千字文説草における法華経説話の特徴とその広がりについて考察してみたい。